欽定訳とルター訳の「創世記」24章50-52節

Genesis 24：50-52 of the Authorized Version and Luther Bible

兵　頭　俊　樹
Toshiki HYODO

2008年10月３日受理

序

15世紀半ばにグーテンベルクが活版印刷を発明し、初めてまとまった本として印刷されたのは聖書であった。原典は、旧約聖書はほぼヘブライ語、新約聖書はギリシア語であるが、中世の西欧ではそのラテン語訳が用いられ、筆写をされて写本として伝えられていた。グーテンベルク聖書は中世の写本の字体を模して作った金属活字で組まれたラテン語聖書であり、教会の典礼や修道院で用いられた。今日ではインターネットでも公開されているこの聖書は、色刷りの装飾もあいまって確かに美しい。

グーテンベルク聖書が印刷されてからほぼ80年後の1534年、ルターが原典から訳したドイツ語訳聖書全巻が完成する。この訳は宗教改革の大いなる遺産として、また近代ドイツ語の出発点としてヨーロッパの文化に大きな影響を及ぼしたことはよく知られている。さらにその80年ほど後の1611年、イギリス国教会公認の聖書となる欽定訳と呼ばれる英訳聖書が出版される。原典からの英訳としては、旧約は全訳ではないが16世紀前半のティンダル訳が先行し、欽定訳はこれに多くを負いつつ、ルター訳も参考にして成立したとされる。これははその後数世紀にわたって国民の聖書としての地位を占め、シェイクスピアと欽定訳聖書の英語は近代英語の性格を決定したと言われる[1]。

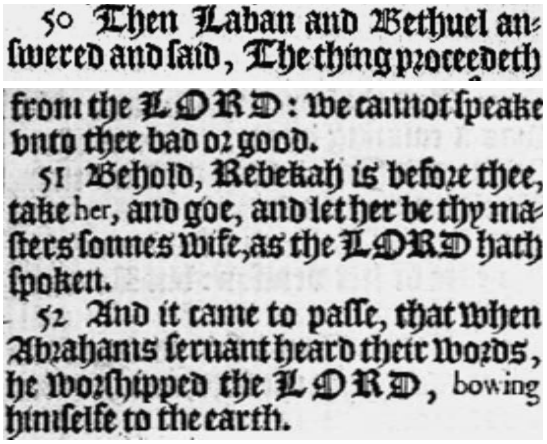
以下の論考は、旧約聖書の物語、字体の歴史とカリグラフィー、言語と文法などへの雑多な関心からのもので、中世写本への足がかりにならないかとも考える。成立の時代順からすれば、グーテンベルク聖書、ルター訳、欽定訳になるが、とっつきやすさを優先してこれとは逆の順で述べる。なお諸々の事情により、グーテンベルク聖書は切り離して別論文として続いて扱う。創世記24章の50-52節を選んだのに特に理由があるわけではない。数多くの聖書が豊富な図版で紹介されている本の中に、数種類の文字を用いて印刷されたコンプルトゥム聖書の一葉がひときわ目を引き、それが50節の後半から始まっていたのである[2]。

Ⅰ　イサクの嫁探し

旧約聖書の創世記24章はイサクの嫁探しの話である。イスラエルの族長の祖アブラハムは、メソポタミアの河口のウルを発ち、北西のハランに滞在した後、カナンの地に至る。高齢になって生まれた息子のイサクが40になる頃、父はその嫁を同族のなかから迎えるために、下僕を故郷へ送り出す。下僕はハランのあたりの井戸の傍らで神に祈った。水を汲みにやってくる娘に水を乞い、自分の駱駝にも水を汲んできてやろうといってくれる娘がいたら、それを探しにきた嫁にしたいと。たちまち娘が水を汲みに現れて、祈ったとおりのことが起こる。金の腕輪を贈って尋ねると、アブラハムの甥ベトエルの娘リベカだという。その家に迎えられた下僕は、ベトエルとその息子ラバンにリベカと出会うまでの経緯を語り、自分の主人アブラハムの息子の嫁としてリベカを連れて帰りたいと言う。

Ⅱ　欽定訳

これに続く50-52節を欽定訳(1611年)のファクシミリ版で示す[3]。文中のtheeは下僕を指している。


50 Then Laban and Bethuel an-
swered and said, The thing proceedeth
from the LORD: we cannot speake
vnto thee bad or good.
51 Behold, Rebekah is before thee,
take her, and goe, and let her be thy ma-
sters sonnes wife, as the LORD hath
spoken.
52 And it came to passe, that when
Abrahams seruant heard their words,
he worshipped the LORD, bowing
himselfe to the earth.

行を対応させてローマン体で示す。

50　Then Laban and Bethuel an-
swered and said, The thing proceedeth
from the LORD：we cannot speake
vnto thee bad or good.
51　Behold, Rebekah is before thee,
take *her*, and goe, and let her be thy ma-
sters sonnes wife, as the LORD hath
spoken.
52　And it came to passe, that when
Abrahams seruant heard their words,
he worshipped the LORD, *bowing*

himselfe to the earth.

50 ラバンとベトエルは答えた。「このことは主の御意志ですから、わたしどもが良し悪しを申すことはできません。51 リベカはここにおります。どうぞお連れください。主がお決めになったとおり、御主人の御子息の妻になさってください。」52 アブラハムの僕はこの言葉を聞くと、地に伏して主を拝した。(新共同訳)

ここで用いられているゴシック体は、極端に均等化された縦線が特徴的で、小文字で特に紛らわしいものとしてｎ,ｕ,ｉ,ｍなどは縦線と菱形の頭と足からだけでできていると言えるほどである。またｃとｅとｒとｔもそれぞれがよく似ている。こうした読みづらさの反面、書く場合には、書き手による文字の違いが生じにくい。早く書けるが、読みにくい。個々の違いよりも全体の統一性の重視ということになろうか。もともとは高価な羊皮紙にできるだけ多くの文字を書き込もうとしたのもおそらくは理由の一つであろう。

なおｓの別形として縦長のｓがあり、ｆと極めてよく似ているが、ｆの横棒が縦の線から右にはみ出していない形である。またｒの別形として、数字の２が跳ねているような半ｒと呼ばれるのがある。引用箇所ではｏ,ｐ,ｂに続く場合に用いられ、これらの文字の右側のふくらみがＲの縦線の代わりとなり、Ｒの右半分が残った形のようである。なおｕとｖは今日のような使い分けとは違って、母音をあらわす場合も子音をあらわす場合も、従来の形ｖは主に単語の頭で使われ、それ以外はｕとｖの間にはっきりした区別はなかったとも、語中ではｕが用いられたともいう[4]。したがって引用箇所のvntoは今日のuntoであり、seruantはservantである。

現代とは違う綴り、語彙、句読法については、引用箇所に関しては以下のとおり。

２人称単数の人称代名詞主格thou、属格thy、目的格thee。動詞の現在３人称単数の語尾-eth。語順に関しては、現代版[5]で52節のthatがheの前に置かれている。また綴りの違いに関しては、語末に-eがついているのが目立つ。以下に現代版の綴りを括弧で示す。

speake（speak）；goe（go）；masters sonnes（master's son's）；passe（pass）；Abrahams（Abraham's）；himselfe（himself）.

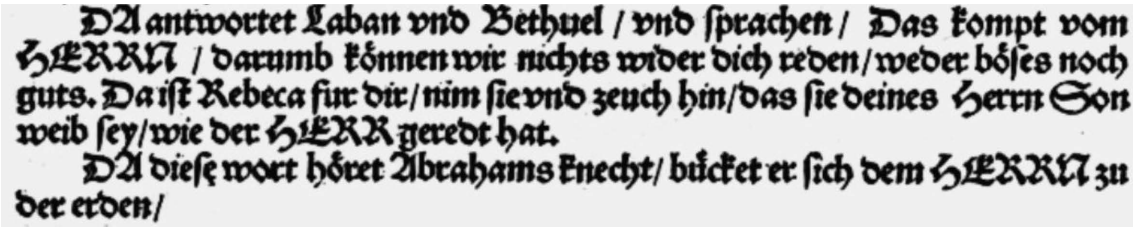
欽定訳の英語は、先行するティンダル訳の影響が著しく、当時からしてもすでに古いと感じられる16世紀の英語であるという。また字体に関しては、1560年のジュネーヴ聖書がローマン体で印刷された最初の英訳聖書だといわれているが、欽定訳では従来のゴシック体が用いられている。英語そのものの古風な古い言い回しとあいまって、文字面からも古色と威厳を醸し出そうとしたものであろうか。ルネサンスの時代を遡って、ルター訳、グーテンベルク聖書、さらには中世の写本へ回帰しようとしているようにも思える。それは今日のわれわれが旧仮名遣いの文語訳聖書を読むのに似た感じだったかもしれない。

なお欽定訳ファクシミリ版では、本文中でherとbowingがゴシック体ではなく小さいローマン体になっているが、転写の部分では便宜的にイタリック体にした。これはこの場合ヘブライ語原文に対応する単語がないことを示しているという[6]。またここには掲げていないが、各章のはじめにある簡単な内容の見出しや本文の欄外の参照指示の部分も小さなローマン体であり、さらには頁の上段の大きな文字の当該頁の内容見出しが大きな活字のローマン体である。ゴシック体は聖書の本文にのみ用いられ、他の部分のローマン体よりも格上の扱いをされているようだ。

Ⅲ　ルター訳

活版印刷が発明されたのちルター訳が出るまでにドイツ語の聖書は十数種類刊行されているが、これらは原典から直接訳されたものではない。ルター訳の新約聖書は1522年、翌1523年には旧約聖書の最初の部分であるモーセ五書の訳が出ている。新約旧約全巻訳は1534年であり、改訂は何度もなされて、生前最後の版は死の前年の1545年に出ている。

(A)1545年版（決定版）の復刻版より


DA antwortet Laban vnd Bethuel / vnd sprachen / Das kompt vom HERRN / darumb können wir nichts wider dich reden / weder böses noch guts. Da ist Rebeca fur dir / nim sie vnd zeuch hin / das sie deines Herrn Son weib sey / wie der HERR geredt hat.
DA diese wort höret Abrahams knecht / bücket er sich dem HERRN zu der erden /

(B)1545年版(決定版)のローマン体表記
50 DA antwortet Laban vnd Bethuel / vnd sprachen / Das kompt vom
HERRN / darumb können wir nichts wider dich reden / weder böses noch
guts. 51 Da ist Rebeca fur dir / nim sie vnd zeuch hin / das sie deines Herrn Son
weib sey / wie der HERR geredt hat.
52 DA diese wort höret Abrahams knecht / bücket er sich dem HERRN zu
der erden /

(C)1984年版(現代版)
50 Da antworteten Laban und Betuël und sprachen：Das kommt vom
Herrn, darum können wir nichts dazu sagen, weder Böses noch
Gutes. 51 Da ist Rebekka vor dir, nimm sie und zieh hin, dass sie die Frau sei des Sohnes
deines Herrn, wie der Herr geredet hat.
52 Als Abrahams Knecht diese Worte hörte, neigte er sich vor dem Herrn
bis zur Erde.

(A)はルターの1545年版(以下これを決定版と呼ぶ)の復刻版のコピー。(B)はこれに行を対応させてローマン体で表記したもの。ただしｏやｕの上に小さく記されたｅは現行のウムラウトで表記し、便宜上節の番号を加えた。(C)はルター訳改訂版でDie Bibel nach der Übersetzung Martin Luthersというタイトルの1984年版をさらに現行の正書法に変えたものである(以下これを現代版と呼ぶ)。綴り、句読点、大文字・小文字の使い分け、単語や語順などが現代のものになっている。単語や語順が異なっている部分があるため、ここでは行についてはおおよその対応でしかない。

今日のドイツ語は名詞の最初の文字を大文字で書くが、これは18世紀に生じた習慣である。決定版では、神を意味する文字はHERRとすべて大文字で、名詞は大文字で書き始められることもあれば、そうでないこともある。段落始めの単語は２，３文字大文字であるが、これは段落をはっきりさせるためであろう。斜線は今日のコンマ,セミコロン、コロンに相当すると思われるが、ピリオドは変わらない。

語形や意味が現代のドイツ語と著しく違っている箇所をいくつか挙げる。決定版51節のdasは今日の接続詞のdassであり、形態上は定冠詞や指示代名詞と同じである。wort(Wort)は中性名詞で、中世には複数１格(主格)・４格(対格)は無変化で、ここでは複数４格である。erde(Erde)は、女性弱変化名詞で単数１格以外は語尾-nがついたが、近世初期のドイツ語もそうであったのだろう。weib(Weib)は英語のwifeに相当する単語であるが、現代版でFrauとなっている。どちらも「妻」の意味である。現代のFrauは「女性、妻」の意味で用いられ、語源は中世のvrouwe「領主夫人、貴婦人、女性」に遡る。また現代のWeibはどちらかと言えば蔑称として「女」を意味するが、ルターは「妻」の意味で用い、これはさらに遡って中世にはwîp「女、女性、妻」であった。FrauにもWeibにも意味の下落が生じていると考えていいのだと思う。

決定版52節の副文(従属節)中の動詞höretの位置が現代とは違っている。副文における定動詞後置は16世紀に次第に多くなり17世紀に統一共通文語の規範のひとつとなった。

副文における定動詞の位置の推移については、次のルターの翻訳の比較から知ることができる。1522年の翻訳では、Sehet zu, das yhr nicht verachtet yemand von disen kleynen(マタイ伝18：10)(これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい)となっているが、1546年の翻訳[7]ではその同じ箇所が、Sehet zu, das yhr nicht jemand von diesen Kleinen verachtet.のように定動詞が文末に配置されている[8]。

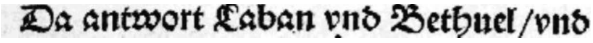
ところで現代版51節はdie Frau sei des Sohnes deines Herrnとなっている。二つ続く２格des Sohnes deines Herrnはdie Frauを修飾するのでその直後に置くのがよいと思えるが、この現代版の編者は定動詞seiを繰り上げている。これは、前述の決定版52節Da diese Wort höret Abrahams knechtに見られるように、副文の定動詞の後置を繰り上げたルターのドイツ語の特徴に合わせようとしたのであろうか。それとも言葉のリズムの問題であろうか。51節のこの部分は決定版で定動詞seyが後置されているのに、なぜだかよくわからない。なお51節のSon(Sohn)は３格にとるべきか。

定動詞の語尾に関して少し述べておきたい。現代版50節のantwortetenという語は決定版でantwortetである。antwortetは、一見したところ現在３人称単数形のように見えるが、今日ではantworteteと綴る過去３人称単数形のはず。この章の47節と58節にsie「彼女」を主語とする３人称単数形としてantwortet、また33

節にはsie「彼ら」を主語とする３人称複数形としてantwortenがあるので、この50節でもantwortetは３人称単数形であり、時制は現在ではなくて過去であろう。さて、この主語は単純に考えればLabanであるが、この後に続くBethuelも主語に含められる。主語が二つあるのに、動詞が単数の変化をするのは奇妙な感じがするが、動詞の後にいくつかの主語が位置する場合、時として動詞の活用形は直後の主語にのみ一致することがあると、現代のドイツ語文法書にはある[9]。現代版では動詞の語尾は主語が複数のときの形にかえている。

ある注釈によれば、この箇所のヘブライ語原文の動詞は３人称単数形で主語は「ラバンとベトエル」であり、これはよくあることだという[10]。この注が参照指示している文法書には、二つ以上ある主語の前に述語動詞がある場合、この動詞の性と数が、最も近い最初の主語に一致することは珍しくないとして、この箇所も挙げられ、さらにこれらの主語の後に別の述語動詞が続く場合、それは主語が複数形のときの形をとるという[11]。ルターは少なくともこの箇所のドイツ語訳でこれをそのまま踏襲している。副詞daを文頭にして、その後に動詞antwortetを置いた後、二つの主語Laban und Bethuelを続けて、さらにその後に別の動詞sprachenを置いているが、先の動詞は主語が単数のときの形で、後の動詞は主語が複数の時の形である。はたしてこれが16世紀当時のドイツ語としてどれだけ自然であったのかは筆者にはわからない。

上に挙げたのはルターの生前最後に出版された1545年版（決定版）であるが、新約旧約の全訳がなった1534年版ではここがantwortとなっている。



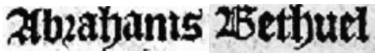
この版では、この章の他の箇所で３人称単数を主語としてantwortもantwortetもあるので、誤植でなければ両方可能だっと思われる。３人称単数現在形や名詞もantwortという形を取るとしたら、時制や品詞を区別する要素が綴りからはなくなってしまい、これらは語順や文脈から推測するしかなくなる。ふと漢文の訓読が思い出される。antwortの綴りで、antwortetともantworteteないしはantwortetenとも読ませたのであろうか。この場合はしかし動詞の語幹がｔで終わっているために過去の語尾teと融合したのだと考えられ、このような動詞が頻出するのでなければ、意味の伝達が困難になるほどでもないのかもしれないが。

Ⅳ　ゴシック活字の変遷

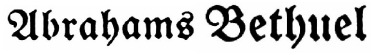
ゴシック体について、歴史的な経緯を含めて文字の特徴について、稿を改めて述べるグーテンベルク版も含めて、もう少し詳しく見よう。いずれにも綴りがほぼ共通する人名の部分を拡大して比べてみる。グーテンベルクのはすべて小文字で、アブラハムにｓがなく、ベトエルの最初の母音はａである。欽定訳には半ｒが見られる。

グーテンベルク

ルター訳（1545）



欽定訳（1611）



フラクトゥール

15世紀半ばのグーテンベルク聖書に用いられた活字は、中世の写本に用いられた書体をもとに作られ、ゴシック体のテクストゥーラ・クァドラータ（textura quadrata）と呼ばれる。文字幅が圧縮され、字形が全体的に角ばっていて、文字の足にあたる部分の菱形が特徴的で、文字の連なりが織られた織物のような印象を与えるところからきた名称であるという。上に挙げたルター訳はこれよりも一世紀近く後のものになるが、文字が丸みを帯びて読みやすくなっている。ドイツのニュルンベルク近くの小都市の名に関係があるらしく、シュヴァーバッハ（Schwabach）体と呼ばれ、ゴシック体の下位に分類される。ルターの初期の著作やパンフレットに用いられ、宗教改革や農民運動のちらし類に愛用され、特に15世紀の終わりから16世紀の半ばまでドイツの印刷界で重要な役割を果たした[12]。これよりもさらに一世紀近く後のイギリスの欽定訳は、グーテンベルク聖書に見られる織物のような印象は残しつつも、やや丸みを帯びて文字が判別しやすくなっている。ルター版に比べた場合、文字の判別のしやすさでは劣るが、特に大文字の様式化された湾曲が洗練された優雅さを感じさせるように思われる。イタリア、フランス、イギリスなどでは早い時期にローマン体がゴシック体に取って代わるが、ドイツでは、シュヴァーバッハ体から派生した狭義のフラクトゥール（Fraktur）が20世紀半ばまで使われ続ける。参考までに上に載せたが、フラクトゥールは大文字の象の鼻のような装飾的な曲線が特徴であり、小文字はこの図版では比較しにくいが、シュヴァーバッハ体のａ，ｂ，ｏ，ｓ，ｖの両側が丸くて天地がとがっているのに対し、フラクトゥールは片側半分が丸くて、別の片側は垂直で折れた形状である[13]。

Ⅴ　24章の内容と解釈

ここで創世記の物語に立ち戻って、24章全体の構成を概観し、50-52節についてはもう少し詳しく考察してみたい。

この章は４つの場面に分けられる。以下カッコ内の数字は節の番号である[14]。

１）カナンでのアブラハムとその下僕（１-９）
２）井戸の傍らでのリベカと下僕（10-28）

3）リベカの家での交渉（29-61）
　a）下僕が家の中へ（29-32）
　b）下僕が自らの使命を語る（33-49）
　c）申し出の受諾（50-53）
　d）リベカと下僕の出発（54-61）
4）カナンでのイサク、リベカ、下僕（62-67）

33-49節は下僕が主人アブラハムから託された使命とその経緯をリベカの家でラバンとその家族に語っている。その内容はすでに創世記の語り手が1-28節で語ったこととほぼ同じであり、現代の我々には繰り返しのようにしか思えない。しかしWenhamによれば、繰り返しに見える33-49節は、リベカがイサクの嫁にふさわしいことをどうにかしてリベカの家族に訴え、特に親権を代行するかに見えるラバンにとっても－アブラハムは現代風に言えば資産家なのだから－これは願ってもない結婚話であることを下僕が必死でアピールしようとしているのだいう[15]。

アブラハムは死の床にあるとの解釈をとる。下僕は誓いを立てて嫁探しに出た。これは主人の遺言とも言うべきこと。是が非でも成し遂げねばならない。できれば主人の存命中に。もしここでラバンが拒否すればどうなるか。その場合は主人アブラハムとの誓いから解かれる(もう誓いにもう縛られないことか)ことになっている。これ以上嫁探しはしなくてもよい。しかし長年アブラハムに仕えてきた下僕は、決して簡単に肩の荷を下ろす気にはなれなかったろう。最後の奉公のつもりであったに違いない。

この話の出所が二つがあって創世記の編者はこれを並置したのに近いのかもしれない。そうではないとする解釈に拠るならば、編者なり語り手なりが一度下僕の嫁探しを三人称を用いて語り、その後で下僕自身の口を通して一人称で出来事を再現するのは意図された手法ということになろう。創世記の生身の語り手がここで年老いた下僕の口吻で語り、下僕の身振りを交えたとすれば、ここには叙事詩から劇への移り変わりのようなものを認めることができようか。

下僕がこうして自ら体験したことを語り終えて、ラバンとベトエルに返事を促す台詞がわれわれの引用箇所の直前にある。49節から52節にかけて二、三の専門家の注を引用しながらみていく。「　」での引用は新共同訳である。

49節で下僕はリベカをイサクの嫁にする気があるかどうかをラバンとベトエルに尋ねる。「そうでなければ、そうとおっしゃってください。それによって、わたしは進退を決めたいと存じます」I will turn to the right or left(= I may look elsehere)：I will take my suit elsewhere, to relatives more mindfull of God and humanity, kinship and wealth.(Wenhham, p.149がSternber, *Poethics*, p.151を引用して)アブラハムの最も年長の信頼厚い下僕は、ただ懇願するばかりではない。交渉が巧みで、相手が承諾せざるを得ないような話の持っていき方をしているように感じられる。もしいやならそれでもいいい。わたしは他を当たってみるからと。

50節「ラバンとベトエルは答えた。」ベトエルの存在を疑問視する考えもあるが（関根p.173；Westermann, p.476)、そうではないとする解釈(Wenham, p.149)もある。「このことは主の御意志ですから」The thing proceedeth；Das kommt；sermo；dabar などであり、この言葉、話し、事、一件は、神に由来する、神が関わっている。ラバンが同じ神を信じているかは疑問だが、下僕の言葉に圧倒されたか。自らの利を考えた上での発言ともとれる。「私どもが良し悪しを申すことはできません」“We cannot contradict anything you say,” lit. “We cannot say to you evil or good.”(Wenham)良いも悪いもない、とやかく言えない、言うことは何もない、是が非でも女房に。

51節「リベカはここにおります」求婚への同意。嫁がせる際の伝統的な口上(Westermann)。

52節「アブラハムの下僕はこの言葉を聞くと、地に伏して主を拝した。」事はアブラハムの言ったとおりに運んだ。下僕の祈りの簡潔な描写だけで、その驚きと安堵と感謝の念が表現される。

おもな参考文献

Die Luther-Bibel von 1534：Vollständiger Nachdruck. Köln 2003.
Martin Luther, *Biblia*：*das ist*, *Die gantze Heilige Schrifft*. Wittemberg 1545(Faksimilierete Ausgabe. Stuttgart 1967).
Die Bibel nach der Übersetzung Martin Luthers. Stuttgart 1984.
J.シルト『ドイツ語の歴史』大修館 1999。
寺沢芳雄他『英語の聖書』冨山房 1969。
橋本功『聖書の英語―旧約原典から見た―』英潮社 1995, 2000³。
田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房 1997。
C.ハメル『聖書の歴史図鑑』東洋書林2004（C.de Hamel, *The Book. A History of The Bible*. 2001)。
『新カトリック大事典』研究社 第1巻 1996, 第2巻 1998, 第3巻 2002。
関根正雄訳『創世記』岩波文庫 1956(1978)。
『新聖書注解　旧約1』いのちのことば社 1976。
C.Westermann, *Genesis 12-36*. Biblischer Kommentar：Altes Testament. Neukirchen 1981.
G.J.Wenham, *Genesis* 16-50. Word Biblical Commentary. vol.2. 1994.
Duden. *Die Grammatik*. 7..Aufl.2005.
Gesenius' Hebrew Grammar, ed.E.Kautzch, tr.A.E. Cowley, Oxfrd 1910².
『世界文字辞典』(『言語学大辞典』別巻）三省堂 2001。
『欧文書体百花事典』朗文堂 2003。
L.プリュゴープト『アルファベットの事典』創元社 2007。

注

1　寺沢芳雄他『英語の聖書』p.80。

2　C.ハメル『聖書の歴史図鑑』p.222。

3　http://dewey.library.upenn.edu/sceti/printedbooksNew/index.cfm?TextID＝kjbible&PagePosition＝100

4　『アルファベットの事典』p.129。

5　21st Century King James Version(1994)による。他の英訳聖書に比べて、できるだけ元の版の形を留めようとしているようである。

6　bowingが原文にないからというのでこれをローマン体にするのであれば、その目的語にあたるhimselfeもそうすべきであるようにも思える。注5で引用したのとは別の版であるNew King James Version(1982)ではhimselfも原文にない扱いとなっている。ただしこの箇所は、bowingとworshipを含んだような意味の一つの動詞で、再帰動詞的なヒトパエル態という活用形というから断定しがたいか。なおherも原文にはないが、これは、ヘブライ語で代名詞目的語がコンテキストがら理解可能な場合はしばしば省略されることによる。欽定訳においてローマン体の使用には一貫性が欠けるとの指摘がある(橋本 p.44)。

7　ルター没後の最初の版は生前の改訂が組み込まれているという(田川 p.520)。

8　J.シルト『ドイツ語の歴史』 p.154。マタイからの訳は新共同訳に替えた。この引用箇所は現代版でSeht zu, dass ihr nicht einen von diesen Kleinen verachtet.

9　*Duden*. *Die Grammatik*. 7.Aufl. S.1014：Wenn eine Reihung mit *und* dem finiten Verb folgt, richtet sich das finite Verb zuweilen nur nach dem ersten Subjektteil...

10　G.J.Wenham, p.136：Sg verb, “he replied,” with multiple subj, “Laban and Bethuel,” quite frequent (GKC, 146f).

11　*Gesenius' Hebrew Grammar*, ed.E.Kautzch, tr.A.E. Cowley, Oxfrd 1910². §146d-h. p.468：When the subject of the sentence consists of several nouns connected by *wāw copulative* [筆者注：この場合andにあたる接続詞], usually

(a) The predicate *following* is put in the plural...

(b) The predicate *preceding* two or more subjects may likewise be used in the plural(Gn 40：1, Hb 3：5, etc.)；not infrequently, however, it agrees in gender and number with the first, as being the subject nearest to it. Thus the predicate is put in the singular masculine before several masculines singular in Gn 9：23, 11：29, 21：32, 24：50...

(c) When other predicates follow after the subjects have been mentioned, they are necessarily put in the plural...

橋本 p.59は欽定訳に同様のことがあるのを指摘している。

12　『世界文字辞典』p.657。

13　『欧文書体百花事典』p.40。

14　Wenham, p.138.

15　Wenham, p.146.